審査結果の要旨

論文提出者氏名　　黄　宝羅

論文題目　　生活行為からみた廊下空間の建築計画に関する研究
－医療・福祉施設におけるケーススタディ－

この論文は、医療・福祉施設における廊下空間を施設利用者の生活空間の一つとして位置付け、これまで単に移動のための付随的空間として扱われてきた廊下空間に対して建築計画における新しい意味づけを行うことを目的としている。

本論文は6章から構成される。

第1章では、近代建築における廊下空間の発生とその位置付けと既往研究の流れ、そして医療・福祉施設に関わる現行の関連法規に関しての廊下の扱われ方を考察している。

第2章では、本論文における廊下空間に対する視点を述べている。まず、従来の廊下空間の性格が移動機能のみに着目されてきたのに対して、各室空間や行為同士の関係性、また時間の経過に沿った行為の移行を助けるものとしての、包括性を論じている。次に施設の生活空間を利用者にとって「まち」の縮小と見たときに、廊下空間を「みち」と捉えることで、そこで発生するコミュニケーションを含む様々な行為に対する「みち」空間の特性について論じている。さらに廊下空間での利用者の生活行為を再認識することは利用者のアメニティ向上に繋がると言う見解を述べている。

第3章では、調査の対象・目的・方法を述べている。さまざまな利用者や建物自体の相違をもつ医療・福祉施設を何らかのハンディを持った利用者が医療・介助サービスを受けつつ生活を送る場所、その中での廊下空間は通路と移動に関わる小空間を含む空間と定義して、7つの施設での実測調査と14人の利用者を対象にして行われた一日の生活追跡観察調査の概要を述べている。

第4章では、調査結果について廊下の空間構成、特にスタッフステーション周り、共用スペース、居室との接合部分、そして他部門との接合部である廊下の端部に関して考察している。

第5章では、ケーススタディを通して、利用者の空間再構築過程を明らかにしている。場は空間とモノによって機能が分化され、モノは利用者が環境特性を把握するに

あたって間接情報の一つとしての役割を果たすことに注目して、利用者の一日の生活行為観察から、モノ・環境的に優位な幾つかの拠点（Anchor Spot）を中心にある程度パターン化された行為を繰り返していることを発見している。

第６章では、廊下における諸生活行為の多様性について考察している。まず廊下空間での行為を移動の流れと停留に分類し、それらの場の占有について考察している。次に、廊下における諸生活行為を利用者のコミュニケーションへの参加形態によって積極的参加、消極的参加、不参加に分類し、個人空間形成に影響を及ぼす要因である「関係」を軸に考察している。その他、無為や共用スペースの匿名性を利用したプライベートな行為、また子ども病院に限定される行為ではあるが遊び行為が廊下空間の柔軟を利用して展開されている観察事実の分析を行っている。

本論文では、廊下空間を移動空間としての通路だけでなく、まわりに存在する停留空間を含めて捉えなおし、廊下空間を利用者の生活空間として位置付けることでそこにおける行為の多様性を発見して、各室空間を繋ぐ付随的空間というよりはむしろ生活を支える積極的な空間として意味づけている。そして、利用者がモノやその関係性から情報を入手し、自分にとっての廊下空間を再構築し、個別化された空間のなかの優位な場所に自己の拠点を置き、移動と停留の繰り返しにより生活を広げている様相を明らかにしている。言い換えれば、廊下空間における諸行為の多様性に関する認識を深め、利用者の場の占有、多様な行為の観察を通して廊下の外側に存在する小空間の利用と形成に必要な要素が明らかにし、室の分化によって失われたモノの中で視覚情報へのニーズを改めて発見しているのである。

以上のように、本論文は医療福祉施設における廊下空間に対する従来からの認識の狭さに対して、広範な使用現状調査を通した考察から重要な指摘を行い、廊下空間に関する新しい意味づけを試みたものである。ハンディキャップを持った人たちの、医療と生活が共存する場を対象とした研究ではあるが、将来的には医療・福祉施設以外の場所でも充分役立つ内容を包含している。高齢社会を迎えたわが国でますます重要視されてきた医療福祉施設における今後のケア環境の在り方について基本的な知見を示し、建築計画学の発展に大きな寄与をしたものである。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。